

飯舘村農業委員会「農地等の利用の最適化の推進に関する指針」

平成31年2月20日

飯舘村農業委員

第1 基本的な考え方

農業委員会等に関する法律（昭和26年法律第88号。以下「法」という。）の改正法が平成28年4月1日に施行され、農業委員会においては「農地等の利用の最適化の推進」が最も重要な必須業務として、明確に位置づけられた。

本村は、阿武隈山系北部の高原丘陵標高220m～600mに位置する純農山村で、基幹作物は水稻、畜産で複合経営の柱である畜産は『飯舘牛』のブランドとして振興を図ってきた。また、施設園芸としては、高冷地の条件を生かした花卉栽培（トルコギキョウ）にも力を入れていた。

このような環境の中、平成23年3月に発生した東日本大震災に起因する原子力発電所の事故により、村内全域が避難指示区域に指定され、平成29年3月に帰還困難区域を除いて避難指示が解除となった。

この間、放射性物質の除去のための除染が優先され、農作物の作付け及び出荷については制限を受けてきたところである。

本村の農業は、農業従事者の高齢化や担い手不足に加え、長期の営農から離れることによる意欲の低下と若者の村外への流出等により離農する農家も増え、さらに厳しい状況下にあることから、飯舘村農業委員会としては、遊休農地の発生防止・解消、担い手への農地利用の集積・集約化など、農地等の利用の最適化に積極的に取り組む必要がある。

以上の観点から、「農業委員会等に関する法律」法第7条第1項に基づき、農業委員と農地利用最適化推進委員が連携し、担当区域ごとの活動を通じて「農地等の利用の最適化」が一体的に進んでいくよう、飯舘村農業委員会の指針として、具体的な取り組みを以下のとおり定めることとする。

なお、この指針は、「農林水産業・地域の活力創造プラン」（平成25年12月10日農林水産業・地域の活力創造本部決定）で、「今後10年間で、担い手の農地利用が全農地の8割を占める農業構造の確立」とされたことから、それに合わせて平成35年を目標とし、農業委員及び推進委員の改選時期である3年ごとに検証・見直しを行う。

また、単年度の具体的な活動については、「農業委員会事務の実施状況等の公表について」（平成28年3月4日付け27経営第2933号農林水産省経営局農地政策課長通知）に基づく「目標及びその達成に向けた活動計画」のとおりとする。

第2 具体的な目標と推進方法

1. 遊休農地の発生防止・解消について

(1) 遊休農地の解消目標

	管内の農地面積 (A)	遊休農地面積 (B)	遊休農地の割合 (B/A)
現 状 (平成 30 年 3 月)	2, 2 2 5 h a	0 h a	0 %
3 年後の目標 (平成 33 年 3 月)	2, 2 2 5 h a	0 h a	0 %
目 標 (平成 35 年度)	2, 2 2 5 h a	0 h a	0 %

(2) 遊休の発生防止・解消の具体的な推進方法

① 農地の利用状況調査と利用意向調査の実施について

- 農業委員と農地利用最適化推進委員は担当地区ごとに、農地法（昭和 27 年法律第 229 号）第 30 条第 1 項の規定による利用状況調査（以下「利用状況調査」という。）と同法第 32 条第 1 項の規定による利用意向調査（以下「利用意向調査」という。）の実施について協議・検討し、調査の徹底を図る。それぞれの調査時期については、「農地法の運用について」（平成 21 年 12 月 11 日付け 21 経営第 4530 号・21 農振第 1598 号農林水産省経営局長・農村振興局長連名通知）に基づき実施する。

なお、従来から農地パトロールの中で行っていた、違反転用の発生防止・早期発見等、農地の適正な利用の確認に関する現場活動については、利用状況調査の時期にかかわらず、適宜実施する。

- 利用意向調査の結果を踏まえ、農地法第 34 条に基づく農地の利用関係の調整を行う。
 - 利用状況調査と利用意向調査の結果は、速やかに「農地情報公開システム（全国農地ナビ）」に反映し、農地台帳の正確な記録の確保と公表の迅速化を図る。
- ##### ② 農地中間管理機構との連携について
- 利用意向調査の結果を受け、農家の意向を踏まえた農地中間管理機構への貸付け手続きを行う。
- ##### ③ 非農地判断について
- 利用状況調査と同時に実施する「荒廃農地の発生・解消状況に関する調査」によって、B 分類（再生利用困難）に区分された荒廃農地については、現況に応じて速やかに「非農地判断」を行い、守るべき農地を明確化する。

2. 担い手への農地利用の集積・集約化について

(1) 担い手への農地利用集積目標

	管内の農地面積 (A)	集積面積 (B)	集積率 (B/A)
現 状 (平成 30 年 3 月)	2, 2 2 5 h a	0 h a	0 %
3 年後の目標 (平成 33 年 3 月)	2, 2 2 5 h a	5 0 4 h a	2 2. 6 %
目 標 (平成 35 年度)	2, 2 2 5 h a	1, 0 0 8 h a	4 5. 3 %

(2) 担い手への農地利用の集積・集約化に向けた具体的な推進方法

① 「人・農地プラン」の作成・見直しについて

- 農業委員会として、地域ごとに人と農地の問題解決のため、「地域における農業者等による協議の場」を通じて、認定農業者等を地域の中心となる経営体と位置付け、それぞれの農業者の意思と地域の資源に照らした実現可能性のある「人・農地プラン」の作成と見直しに取り組む。

② 農地中間管理機構等との連携について

- 農業委員会は、村、農地中間管理機構、ふくしま未来農業協同組合等と連携し、(ア) 農地中間管理機構に貸付けを希望する復元可能な遊休農地、(イ) 経営の廃止・縮小を希望する高齢農家等の農地、(ウ) 利用権の設定期間が満了する農地等についてリスト化を行い、「人・農地プラン」の作成・見直し、農地中間管理事業の活用を検討するなど、農地の出し手と受け手の意向を踏まえたマッチングを行う。

③ 農地の利用調整と利用権設定について

- 管内の地域の農地利用の状況を踏まえ、担い手への農地利用の集積が進んでいる地域では、担い手の意向を踏まえた農地の集約化のための利用調整・交換と利用権の再設定を推進する。

また、農地の区画・形状が悪く、受け手が少ない又は受け手がいない地域では、農地中間管理機構による簡易な基盤整備事業の活用と併せて集落営農の組織化・法人化、新規参集の受入れを推進するなど、地域に応じた取り組みを推進する。

④ 農地の所有者等を確知することができない農地の取扱い

- 農地の所有者等を確知することができない農地については、公示手続を経て福島県知事の裁定で利用権設定ができる制度を活用し、農地の有効利用に努める。

3. 新規参入の促進について

(1) 新規参入の促進目標

	新規参入者数 (個人)	新規参入者数 (法人)
現 状 (平成 30 年 3 月)	0	0
3 年後の目標 (平成 33 年 3 月)	1 0	3
目 標 (平成 35 年度)	2 0	5

(2) 新規参入の促進に向けた具体的な推進方法

① 関係機関との連携について

- 福島県・全国の農業委員会ネットワーク機構、農地中間管理機構及び村と連携し、管内の農地の借入れ意向のある認定農業者及び参入希望者（法人を含む。）を把握し、積極的に支援する。

② 新規就農フェア等への参加について

- 村、ふくしま未来農業協同組合等と連携し、新規就農フェア等に積極的に参加することで情報の収集に努め、新規就農の受入れとフォローアップ体制の整備に努める。

③ 企業参入の推進について

- 担い手が十分いない地域では、企業も地域の担い手になり得る存在であることから、農地中間管理機構を活用して、企業の参入の推進に努める。

④ 農業委員会のフォローアップ活動について

- 農業委員及び推進委員は、新規参入者（法人を含む。）の農地に関する要望等のサポートに努める。